第五期リーダーセミナー
清里サマーセミナー
（株）印傳屋上原勇七 を訪ねて

山梨県甲府市にある印傳屋上原勇七。創業は一五八二年（本能寺の変があった年）と四百年以上独自技法で印伝を作り続けているとのこと。印伝とは、印度伝来を略したものとも伝えられ、鹿の皮をなめしたものを言うそうです。戦国時代には、鹿革と漆の産地だった甲斐の国で鎧や兜の補強や防水、装飾に用いられ、次第に発展して現在に至っているとのことです。

一子相伝

印伝製造の技術は、代々家長である「勇七」のみに口伝えされていました。十三代である現会長が秘伝とされていた印伝製造の技術を「従業員と技術を共有しなければ、企業として発展しない」と考え、職人にも公開したそうです。この決断を並大抵のことではないと思われます。長年一緒に会社を支えてきた職人・社員との信頼関係があったからこそ、この決断ができたのだと考えます。職人の育成にしても、常に対話を大切にし、より良い技術や製品を求めていく努力をされているとのことです。

本講話では、同族経営においては、長いスパンでものごとが決定できるメリットが強調されていました。時間がかかる事業だという言葉からも、信頼され、愛されることが長く続けて来られた大きな要因だと感じました。

進化する伝統

印伝屋上原勇七は、伝統を重んじながらも、自然とお客様が欲しがっているものを作り、新しい事にもチャレンジして来られたそうです。海外ブランドのティファニーやグッチからも素材提供のみを依頼された時、対等な立場で共同作業を進めるのでなければという条件を提示し、実行されたのには信念を感じました。「相手がどんなに大きな世界的なブランドだとしても、伝統企業としてのブランドを貫く」方針があったからこそできることであり、その裏には確固たる企業姿勢があったのだと思います。逆に、こうした姿勢が海外大手ブランドからも認められる要因となり、両社が協力して良い製品を作る事につながったのだと思います。

常に対話をもつ

印伝屋では、相手先企業に対してはもちろん、社内においても円滑なコミュニケーションを大切にしているとのことです。一例としては、企業理念が挙げられます。企業理念を制定する際にも、これからの印伝屋はどうあるべきかということや進むべき方向について、全社員と半年以上の年月をかけて議論したそうです。上からの押し付けの理念

やうわべだけの理念ではなく、全社員を取り込んだ本当の意味での企業理念を社内に浸透させ、外部にも発信しています。時間はかかったようでも、今後の長い年月に渡り理念が浸透していくことを考えれば、この半年の取り組みは大切なものであったと思います。

印伝屋の大切にしている考え方

印伝屋では、社員として働く上で、以下のことを徹底してもらっているそうです。

・印伝屋の思いや約束に共感してもらい、愛され信頼される会社になること。

・大量生産・大量消費の時代が終わり、高品質なものを大事に長く使うことに重点が置かれるようになってきた昨今では、ふるさとの甲州の歴史・文化・人々の暮らしや自然の美しさを大切にする。

・印伝は、甲州に生まれ育ち、甲州のお陰で続いている。企業は、信頼され続けるからこそ存続し繁栄するように、私達も信頼され愛され続けることにより幸せな人生をつかむ。

こうした変わらぬ甲州への想いと感謝を持つからこそ、印伝屋の商品は、地域にも愛され続ける商品となり、ひいてはお客様にもその思いが伝わる商品作りにつながっているのではないかと感じました。

研修に参加して

講話を聞き、印伝屋では同族経営の持つ良さが代々引き継がれてきていることを感じた。時代と共に進化し続けている部分と、企業の伝統として守っていくものが明確であり、進むべき方向が定まっていました。週一回の家族全員での食事会、知人をもてなす食事会等、職人との議論も含め、そうした普段からの意思疎通の機会を設ける姿勢は、同族経営の忘れてはならない基本であると思い返しました。

また「違いをいかす」ということを上原重樹社長はおっしゃっていましたが、その言葉の奥には、天然素材で作られる印伝の難しさだけではなく、それを扱う人に関しても言及していると強く感じました。素材も人もそれぞれ違いがあり、その違いが難しければ難しいほど、できてくる印伝にも奥深さを与え、経営にもいかされており、甲州印伝が愛され続けている理由の一つになっているのではないかと思います。私の仕事も同族経営で、天然素材を使って商品を作り上げているので、大変共感する部分がありました。私の会社も、そのようなお客様や地域からも愛され続ける商品を作り続ける会社にしていきたい、そう強く感じた研修となりました。

※写真はリーダーセミナーの HP より引用させていただきました。

2018 年 8 月 31 日

青年塾十六期　関西クラス

小笠原義雄